## 7）腹　部　外　傷

小山　高宣（新潟県立中央病院外科）

自動車数の増加，運転免許取得者数の増加に加えて交速交通網の発達とともに交通事故による死傷者数も，ここ数年来増加の一途をたどっている．交通事故による死傷者中，腹部外傷を主とするものは，頭頚部・胸部・背柱等を主とするものに比べてその比率は低く数%にすぎないが，その診断及び治療に関してはかなり困難をきわめる事も少くない．

受傷直後から症状及び所見がはっきりする事も少なくないが，中には1週以上経てから症状及び所見を呈してくるものもある．特に多発外傷では一方に気をうばわれて，つい他の部位の損傷を見逃すおそれを否定できず，特に意識障害や痛覚の麻痺を伴う脊髄損傷などの際には留意すべきことと思われる．

本院の腹部外傷について，その特徴と概要を呈示し，腹部外傷全般についての診断，治療を述べ，各臓器別の症状，診断，治療についての概要を述べた．

## 8）眼　　外　　傷

高木　峰夫（新潟大学眼科）

交通事故による眼外傷は，他の臓器への外傷に比べ数こそ少ないが，失明にいたる重傷例が少なくない．眼外傷でも，特に交通事故に特徴的なものは，① フロントガラスによる穿孔性眼外傷，② ダッシュボードによる眼窩壁骨折，③ バイクの転倒による視神経管骨折の3つである．なかでもフロントガラスによる穿孔性眼外傷が圧倒的に多く，その40%が失明に至っており，年間およそ1000人の失明者が出ていた．これに対してシートベルトの着用に合わせガラスの使用が法制化され確実に効果を上げている．診断は点眼麻酔のうえ開瞼器やデマル氏鈎を用いて開瞼すれば難しくない（圧迫厳禁）．眼内ガラス片の有無をCTで行い，即手術で穿孔創を塞いで種々合併損傷に対する処置を行う．眼窩壁骨折で最も多く特徴的なのは眼窩吹抜け骨折で，最も弱い下壁の骨が割れ下直筋の進展障害をおこし複視をきたす．眼球運動のチェック・眼球陥凹（初期には眼球突出）・口唇の知覚麻痺で疑い，Waters 法撮影・CT で骨折と嵌頓を検出し，眼球の牽引試験で伸展障害を証明する．浮腫の軽減をはかり，著明なものには骨折の整復を考慮する．視神経損傷，いわゆる視神経管骨折は重傷の頭部外傷に付随することが多く発見が遅れがちである．眉毛部外方の打撲・対光反応の異常・鼻出血により疑い，視神経管撮影・CT で骨折をチェックするが，実際には骨折がなくても浮腫や出血によって障害されるケースが少なくない．浮腫の軽減をはかり適応者には早期に視神経管開放術を行う．